

トルストイの生命論

宮坂和男

(受付 2009年10月9日)

唐突に人命が失われた報に接して、大きなやりきれなさから逃れることができず、思わず大きくため息をつくことがしばしばある。近年起こった事件や事故だけに限っても、2008年6月に、東京秋葉原の路上で何人もの人が通り魔の凶刃の犠牲になったことや、2005年4月に、JR西日本宝塚線の列車脱線事故によって、100人以上の人命が一瞬にして失われたことが思い出される。本人や家族、友人らが味わった無念さは、当然のことながら想像してあまりあるものであろう。「ほんの数メートル離れた場所を歩いていたら……」、「一本でも違う電車に乗っていたなら……」のようについ考えられるのではないか。同様の事件や事故は、枚挙に暇がないほどたくさんある。

あまりにも簡単に人生が終わらなければならぬケースに接するとき、われわれの多くは「人間が生きることにはどのような意味があるのか」、「人生はそもそも生きるに値するものなのか」といった問いを発したくなるのではないか。

トルストイのよく知られた短編小説『イワン・イリイチの死』¹⁾は、まさにこのような問題について考えようとして書かれたものにほかならない。裁判官として同年代の誰よりも早い出世を果たしたイワン・イリイチは、あるときはしごを踏みはずして脇腹を強く打つというあまりにもつまらない出来事から病を得、その病を克服することができず、45歳で死を迎えなければならなくなる。病を得てからのイワン・イリイチは、気持ちが荒れてゆき、死ぬ数時間前まで怒りやりきれなさから脱することができない。

本稿はこの『イワン・イリイチの死』の内容に即して、人生の意味についてトルストイが考えたことを検討しようとするものである。

『イワン・イリイチの死』では、最終部分で決定的な心境の変化が生じたことが描かれており、荒廃しきっていたイワン・イリイチの気持ちが一転して至福に満たされた状態へと変っている。イワン・イリイチは最後の最後に救いを得ているのである。死を迎える最後の数時間、うなり声をあげ続けるイワン・イリイチは、周囲の人の目には苦しんでいるようにしか見えないが、トルストイはこの状態を、本人としては死を安んじて受け容れた状態として描いている。

1) トルストイ(望月哲男訳)『イワン・イリイチの死』(光文社古典新訳文庫、2006年)。

この最終場面には、生と死をめぐるトルストイの思想が凝縮していると言うことができるが、その具体的内実は、彼の『生命論』（邦訳では「人生論」と訳されている²⁾）の内容を参照するときようやく明らかになる。これは、「人間が生きるとはどのようなことか」についてトルストイが晩年に考えたことを記した論考である。本稿では、『イワン・イリイチの死』の内容に『生命論』の議論を補完することによって、人間の生と死についてトルストイが巡らせた思想の内容を見てゆくことにしたい。一言だけ予告すれば、そこで中心に来るのは《愛》の思想である。

そしてこの後にわれわれとしては、トルストイの思想に批判的検討をも加えながら、人生の意味に関するわれわれ自身の考えを深めることを試みたい。その際われわれが一つの基準として採用するのは、V・E・フランクルの実存思想である。周知のようにフランクルは、人生の意味について説得的な議論を示すことに成功している数少ない思想家の一人である。なおフランクルは『イワン・イリイチの死』にも言及しており、トルストイの思想を検討した形跡が窺える³⁾。

また本稿では、上の問題について考える過程で、終末期医療に関わる問題にも言及することにしたい。多くは、死を迎えなければならない患者の心理状態に関わることである。実在の人物をモデルにしたことも手伝ってか、トルストイの描写は非常に現実的なものとなっており、トルストイの筆力を十分に示すものとなっている。『イワン・イリイチの死』は、創作であるにもかかわらず、終末期医療の問題を考えるための十分な材料をわれわれに提供してくれる。本稿では、これらの問題についてもあわせて論じることにしたい。

1

生まれつき出来のよかったイワン・イリイチは、法律学校を優れた成績で卒業したのをはじめ、あらゆる方面においてすべてを抜け目なくやり通すことができた。そして、裁判官として同輩をはるかに上回るスピード出世を果たした。もちろん困難にもぶつかったが、すぐれた機知と大胆な行動力によってそれを首尾よく打開することができた。イワン・イリイチは裁判官という誰からも敬意を払われる地位を得、人の運命をも左右しうる特別な立場を手に入れた。もちろんそれは、イワン・イリイチの自尊心を大いに満たすものであった。

イワン・イリイチが追及して獲得したのは、簡単に言えば、やはり世俗的な価値だったと

2) トルストイ（原卓也訳）『人生論』（新潮文庫、1975年）。ロシア語の原題は“О ЖИЗНИ”であり、これは「生命」、「人生」、「生活」などの意味を同時に兼ね備えた、英語の“life”に当たる語である（「訳者解説」、218頁以下を参照）。

3) ヴィクトル・E・フランクル（中村友太郎訳）『生きがい喪失の悩み』（エンデルレ書店、1982年）、165頁。

言えよう。良家の申し分のない娘との結婚も果たし（もつとも、この結婚は失敗だったと後にイワン・イリイチは考えるようになったが）、昇進と同時に赴任した新天地で豪邸を購入した。そして、それを改装して装飾を施し、召使いを雇った上で家族を迎え入れた。イワン・イリイチは「彼がこうあるべきだと思う形で」⁴⁾ 自らの成功を証し立てようとしたのである。

このようにして家を改装する過程で、件の事故が起こった。イワン・イリイチは物分かりの悪い経事屋に、壁紙をどのように貼るべきか手本を示そうとしてはしごに登り、うっかり足を踏みはずして、脇腹を窓枠の取っ手に強くぶつけた⁵⁾。

イワン・イリイチはもちろん痛みを覚えたが、それに特に気をとめることなく、順風満帆な生活を続ける。ところがしばらくするうちに、痛みが次第に強まって耐えがたいものとなり、さらに口のなかで妙な味がするという不快な症状も加わる。こらえられなくなったイワン・イリイチは医者診断を仰いだが、返ってきたは次のような何やら不明瞭な答えであった。

これこれの兆候は、あなたの体にこれこれがあることを示しています。しかしもしも検査してそれが見つからなければ、あなたの体にはこれこれがあると想定しなくてはなりません。そして仮にそのように想定するとすれば……⁶⁾

イワン・イリイチの関心はもちろん、自分が危険な状態にあるのかどうか、どのようにして不快な症状が除かれるのかということにあったが、医者はイワン・イリイチの質問には取り合わず、遊走腎と盲腸炎とが考えられ、可能性としてどちらがより有力であるかをもっぱら問題にした。

そして医者はその議論をイワン・イリイチの目の前で見事に解決し、盲腸炎に軍配を上げた。ただしひとつ留保をつけて、尿検査の結果新しい兆候がみいだされることもあるので、その時は再検討しようと言った。……こうして見事に所見を述べると、医者は意気揚々と、ほとんど愉快そうな顔で、眼鏡越しに被告を一瞥したのだった⁷⁾。

ここには、医療の現場でよく見られる問題が現われている。すなわち、医者の説明が患者の気持ちに応じたものにならないという問題である。患者の関心は何より、病気が治って快

4) 『イワン・イリイチの死』、45頁。

5) 同、53頁。

6) 同、64頁。

7) 同、65頁。

適な生活が戻ることにあるが、医者の説明はしばしばそれに答えるものにならず、科学的に適切な解説を与えることに重点が置かれる。これは、イワン・イリイチ自身が被告の前で何回も行ってきたのと類似したことであった。

患者と医者との間で関心がしばしばかみ合わないということについては、ここで少し述べておきたい。山崎章郎医師はあるときキューブラー＝ロスの『死ぬ瞬間』を読み、患者の望むことが医者の思うこととはまったく違うことを知って、「体じゅうの血液が逆流するのではないか」と思うほどの衝撃を受けたという⁸⁾。キューブラー＝ロスのこの書は、病気で死を迎えなければならない人がどのような心理過程を辿るかを明らかにしたものとして、今日では医療関係者の間で広く読まれている。だが、山崎医師がこの書をはじめて読んだ1983年には、その内容はまだあまり知られていなかったようである。

「最期を迎えようとする患者には、鎮痛剤よりも好きなぶどう酒を飲ませてあげるほうがよい」とか、「輸血よりも家庭のスープのほうがはるかにうれしいものだ」といったことは、われわれ患者にとっては、むしろ自明なことであるが、当時の山崎医師にとっては非常に驚くべき内容であったという。それ以前の山崎医師にとっては、一分一秒でも患者の生命を長らえるように努力することが終末期医療の常識であった。今日では、医者と患者との間にここまで大きなずれがあるとは思えないが、仄聞するところでは、両者の食い違いを思わせる話は非常に多い。「ドクター・ハラスメント」が話題になる所以である。

また、スキルス胃がんになった妻の治療に当たった熊沢健一医師は、あるとき、抗がん剤治療の大きな効果を確認することがあった。CT撮影で確かめたところ、腫瘍の顕著な縮小が見られたというのである。歓喜して妻にそのことを報告したが、妻には「そんなこと言っただって症状はなんにも変わっていないわ。症状も良くならないのに、医者だけ浮かれていたって仕方がないじゃないの」と素気なくあしらわれてしまう⁹⁾。患者にしてみれば、問題はがんの大きさそのものではなく、病気の苦痛、抗がん剤治療の副作用による不快感のほうである。科学的な解説よりも快適な日常生活を送ることのほうが、患者にとってははるかに重要なのである。

2

医者診断によってかえってからだを強めたイワン・イリイチは、やがて、脇腹の痛みで終日気をとられるようになる。これまですべてを首尾よく達成し、困難を打開してきたイワン・イリイチであるが、このような単純な障碍を乗り越えることができない。イワン・イ

8) 山崎章郎『病院で死ぬということ』(文春文庫, 1996年), 117頁。

9) 熊沢健一『告知』(PHP文庫, 2004年), 78頁。

リイチの人生は暗転し、日々の生活は意気軒昂なものから陰鬱なものに変わってゆく。彼の目にはありとあらゆる風景が陰気なものに映るようになる。

新しい生活のなかでイワン・イリイチの気持ちは動揺を繰り返す。得意のカードゲームで大逆転の手を打つ場合を想像しながら、「きっとよくなる」「何とかなる」と自分に言い聞かせ、自分を懸命に励ますが、とたんに強烈な痛みがぶり返して、打ちひしがれた気分へと引き戻される。このような過程を経てイワン・イリイチは、自らの死が近いことを認めざるをえない状況に追い込まれる。イワン・イリイチの病気は結局診断がつかず、病名も定かでないまま、死という結末だけが明らかになるのである。

自らの死に本気で向き合ったとき、当然のことながらイワン・イリイチはさまざまな思いを巡らした。まず自覚されたことは、《死》を自らのこととして考えることの難しさである。イワン・イリイチは学生時代に「カイウスは人間である。人間はいつか死ぬ。したがってカイウスはいつか死ぬ」という三段論法を学んでおり、人間は誰でもいつか必ず死ぬことを間違いなく知っていた¹⁰⁾。それにもかかわらず、いざ自分のことになると、死を当然のこととして受け容れることができない。誰にとっても自分は特別な存在であり、その他の大勢の人たちと同様のものには思えないのである。

次に感じられたのは、はしごを踏みはずして脇腹を打っただけで死ななければならないという事実の理不尽さである。イワン・イリイチはやりきれない気持ちを抑えることができない。

さて、これはいったいどういうことだ？ なぜこうなったんだろう？ こんなことはありえないじゃないか。人生がこれほど無意味で、忌まわしいものだったなんて、おかしいじゃないか。それにももしも人生がこれほど忌まわしい、無意味なものだったとしたら、なぜ死ななくてはならない、しかも苦しんで死ななくてはならないんだ？ なにかがおかしいぞ¹¹⁾。

「こんなことがあっていいわけではない」「なぜだ」と内心で何度も問いかけるが、賢明なイワン・イリイチはそれに対する答えがないことにすぐに気づく。自分がこのようにして死ななければならないことは紛れもない現実であり、それ以上説明のつけようのないことなのである。

そしてイワン・イリイチは、これまでの人生を振り返り、自分の生き方が本当に正しかったのかどうかを問い始める。イワン・イリイチはひたすら世間的な価値を追求してきたが、

10) 『イワン・イリイチの死』、86頁。

11) 同、122頁。

それをあえて否定する生き方のほうが実は正しいのではないかという疑念にとらわれるようになる。そしてこの疑念は、人生の結末が《死》であるという事実を銘記するとき、もっとも大きくなる。すなわち、出世街道をひた走ったイワン・イリイチの人生はもっぱら上昇の道筋を辿っているように見えたが、それは見かけのことにすぎず、実は破滅に向かって進んでゆく下降の道ではなかったか、ということである。

自分では山に登っているつもりが、実は着実に下っていたようなものだ。まさにその通りだ。世間の見方では私は山に登っていたのだが、ちょうど登った分だけ、足元の命が流れ出ていたのだ……。そしていま準備完了、さあ死にたまえ、というわけだ！¹²⁾

考えてみれば、人間は誰しも、生まれて以来もっぱら破滅（死）に向かって進んでゆく。少なくとも壮年を過ぎれば、肉体は着実に衰えてゆき、病気や苦痛も増えてゆく。状態がひたすら悪くなる一方のなかで人間は生き続けなければならない。死を間近に控えた苦悶の床にあっても、イワン・イリイチはこの人生に関する最大の難問にとりつかれ、悩み苦しむ。やりきれなさを拭えず、気持ちが荒みきったまま、イワン・イリイチは生涯を閉じるかに見えた。

3

ところが、死を三時間後に控えたある瞬間、イワン・イリイチの心境は劇的に変化し、彼は一転して救いを得る。イワン・イリイチは死の恐怖から脱却し、至福の感情に包まれ、納得して死んでゆく。

この変化が生じたのは、自分が苦しむのを息子と妻が見て悲しみ、涙を流す姿を見た瞬間であった。このときイワン・イリイチは、自分が死ねば、家族がいまこのように味わっている悲しみから解放され、その点で自分の死が役立つことに気づいたのである。トルストイの描写を辿っておこう。

このとき彼は察した。散々彼を苦しめて、どうしても体から出てゆこうとしなかったあるものが、にわかに出てゆこうとしている。それも二方向、十方向、いやあらゆる方向から、全部いっぺんに出てゆこうとしているのだ。

妻や子がかわいそうだ。彼らがつらい目にあわないようにしてやらなくては。彼らを

12) 同、122頁。

この苦しみから救えば、自分も苦しみをまぬかれる。

「なんと良いことだろう、そしてなんと簡単なことだろう」彼は思った。「だが痛みは？」彼は自問した。「痛みはどこへいった。おい痛みよ、おまえはどこにいる？」

彼は耳をすました。

「ほらここだぞ。だがかまうな、痛みなど放っておけ」

「では、死は？ 死はどこだ？」

彼は自分がかねてからなじんできた死の恐怖を探してみたが、見出せなかった。死はどこにある？ 死とは何だ？ 恐怖はまったくなかった。死がなかったからだ。

死の代わりにひとつの光があった。

「つまりこれだったのだ！」突然彼は声に出して言った。「なんと歓ばしいことか！」¹³⁾

イワン・イリイチは、自分の家族を本気で愛することができたとき、死ぬのが怖くなくなり、痛みも感じなくなったとトルストイは述べているのである。『イワン・イリイチの死』は、最終場面でトルストイの筆致が一変することをひとつの特徴としている。それまでの現実的で説得力をもった描写と違って、最後に描かれているのはイワン・イリイチの内面の状態である。ときおり叫び声をあげてうなり続けるイワン・イリイチは、外から見れば苦しんでいるようにしか見えないが、それをトルストイは、内面的には満たされた状態にあるものとして描いている。ここに示されているのはトルストイの想像ないしは推測である。

この場面からわれわれには、終末期医療に関わる大きな問題が思い出される。それは、「人が自らの死を受け容れて、喜んで死んでゆくことは本当にできるのか」という問題である。この問題についてここで検討しておくことにしよう。

答えから先に述べれば、「できる」と言うことができる。佐藤智医師が伝えている実話は、トルストイの描写に合致するものになっている。佐藤医師の父親は、自らが治らないがんであることを息子から告知され、怒り悲しみ、息子にすがるなどの段階を経ながらも、最後は明るく死んでいったという。「今はまったく悟りきった禅坊主のような心境だ」と言ってテープレコーダーに遺言を吹き込み、準備万端整えた上で、非常に晴れやかな表情をして死んでいったという¹⁴⁾。トルストイの話は決して現実離れたものではないのである。

次に引用するのは、治らないがんによって40歳代で死ななければならなかった男性が、自分の子供たちにあてて遺した手紙の一部である。山崎章郎医師が紹介している、現実にかかれた手紙である。

13) 同、138頁以下。

14) 佐藤智「在宅医療 生命倫理から考える」、斉藤隆雄（監修）、神山有史（編集）『生命倫理学講義 医学・医療に何が問われているか』（日本評論社、1998年）、240頁。

正直言って自分が近いうちに死ぬかもしれない、ということは少しも怖くなかった。それはほんとうのことだ¹⁵⁾。

……(中略)……

死ぬかもしれないことが、少しも怖くない理由がいまよくわかった。お父さんがお前たちのことを命も惜しくないほど愛していて、そしてお前たちも同じくらいお父さんのことを愛してくれているのを感じているからだ。

そうなのだ。死を乗り越えることができるのは勇気でもあきらめでもない、愛なのだ。愛していること、愛されていると感じ合えたときに、すべての恐怖は消え去っていくのだ。やがて、いつかきっとお前たちにもわかる日がくるだろう¹⁶⁾。

この内容もまた、トルストイの説を裏づけるものにほかならない。この男性は死の恐怖を完全に乗り越え、安んじて死を迎えている。さらに、それが愛ゆえに可能なのだと述べている点も、トルストイの考えと一致している。この男性は、愛情に基づく家族とのつながりを確かめることができたとき、死ぬのが怖くなくなったと言っているのである。

『イワン・イリイチの死』の最後の場面が決して単なる想像ではないことは、強調に値することであろう。トルストイの筆はたしかに真実をついている。『イワン・イリイチの死』はやはり、トルストイの作家としての力量を大きく証し立てている作品なのである。

ただもちろん、すべての人が歓喜のうちに死ぬわけではない。トルストイはここで、人間の死に関わる事実について述べようとしたのではなく、生と死をめぐる自らの思想を表そうとしたと見るほうが正しいであろう。このことは、彼の『生命論』の内容を参照するとき明らかになる。『生命論』は、「人は何のために生きるのか」、「人が生きるとはいかなることか」について、トルストイが晩年に考えたことを記したものである。次にわれわれは、『生命論』の内容を検討し、それを補完することによって『イワン・イリイチの死』の最終部を理解することを試みなければならない。

また、先の引用箇所にも見られたように、トルストイは「死がない」「痛みがない」といった内容のことも述べており、『イワン・イリイチの死』の最終場面は多くの謎を感じさせるものになっているが、これによって意味されていることもまた、『生命論』の内容と突き合わされるととき明らかになるであろう。

15) 山崎章郎、前掲書、209頁。

16) 同、213頁以下。

4

『生命論』のなかでトルストイは、「人は幸福になりたいと欲して生きているが、なれない」という、人間の生が抱える最大の難問に取り組み、その上で人間がいかにして生きるべきかを論じようとしている。人間は誰でも、将来さらに幸福になることを望んで生きているが、それははじめから不可能である。というのは、年齢を重ねれば誰にでも分かるように、人は長く生きれば生きるほど肉体が衰え、病気になることも多くなり、また不快なことや悩みも増えてゆくからである。そして、その行き着く先は破滅（死）にほかならず、われわれの人生には最後に最大の不幸が待ち構えている。われわれは日々、最大の不幸に近づきながら生きているのである。

最大の望みがはじめから実現不可能であるならば、人間は一体何を目標にして生きてゆくことができるのであろうか。人間を、細胞という最終単位から構成された存在（動物的生存）として考え、生命現象を物質とエネルギーによって解明しようとする自然科学は、人間の生（命）に関わるこのような根本的疑問に答えることができない。人間の生（命）は、その最も本質的な部分においては科学によっては解明されえないのである。この問題に対する答えをトルストイは、さまざまな宗教の教えのなかに見出そうとする。トルストイが参照したのは、キリスト教、ユダヤ教、儒教、バラモン教、仏教、ゾロアスター教などの経典や教義である。

その結果トルストイが行き着いた結論に注目しなければならない。それは、自分の幸福のためではなく、他人の幸福のために生きるという原則である。人間の生がかかえる先の根本的難問を解決しようと思えば、自分の幸福を実現しようとする生き方を見直し、それと正反対の方向を進まなければならないとトルストイは言う。

お前は、みながお前のために生きることを望んでいるのか、みんなが自分よりお前を愛するようになってもらいたいのか？ お前のその望みがかなえられる状態は、一つだけある。それは、あらゆる存在が他人の幸福のために生き、おのれ自身よりも他人を愛するような状態だ。そういう場合にのみ、お前も他のすべての存在も、みなに愛されるようになるし、お前もその一人として、望み通りの幸福をさずかることだろう。お前にとって幸福の可能なのは、あらゆる存在が自分よりも他を愛するようになる時だけだとしたら、お前も、一個の生ある存在として、自分自身よりも他の存在を愛さなければならない¹⁷⁾。

17) トルストイ『人生論』、100頁。

トルストイがここで述べていることは逆説的である。幸福になることを断念したとき、かえって人間は幸福になれると述べているからである。自分の幸福のためにはなく他人の幸福のために生きるという生き方をすべての人が実行するとき、自分もまた他人から愛され、それによって幸福になることができるというのである。『聖書』の「マタイによる福音書」には「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失うものは、それを見出すであろう」¹⁸⁾とある。

これをトルストイは「理性の法則」と呼び、われわれの「理性的な意識」はそれを自明のものとして理解し、それに従って生きていると言う。イワン・イリイチが死ぬ間際に救いを得、至福の感情に満たされたのも、彼の意識の状態がこの法則に合致するものになったからである。この瞬間イワン・イリイチは、自らの成功や出世を望む気持ちから離れて、家族の幸福を本気で願った。彼は、自分が死ねば家族が現在味わっている悲しみから解放され、その点で自分の死が役立つことに気づいた。そのとき、荒みきった精神状態を脱して至福の感情に満たされ、歓喜して死んでゆくことができたのである。

この法則はずっと以前からさまざまな宗教によって明らかにされてきたにもかかわらず、人間はそれを忘れてしまう。人間はどうしても自らの幸福への欲求にとらわれてしまうからである。この欲求の主体をトルストイは「動物的個我」と呼んでいる。本能的なものをはじめとするさまざまな欲求を充足させることに専心する自我のありようのことである。トルストイによれば、この動物的個我を「理性的な意識」に従属させることができないとき、人は自分一人の幸福を望む欲求にとらわれた状態に戻ってしまうという。

動物的個我の欲求を封じて他の人の幸福を願うことができるとき、人間の生をめぐる例の矛盾が解消され、人間は真の意味の幸福を手に入れることができるとトルストイは言う。他の人に向かうこの意識の働きは《愛》にはかならない。

人間はだれでも、ごくごく幼い頃から、動物的個我の幸福以外に、もう一つ、もっとすばらしい生命の幸福があって、それが動物的個我の肉欲の満足とかかわらないばかりか、むしろ反対に、動物的個我の幸福を否定すればするほど、ますます大きくなってゆくことを知っている。

生命のあらゆる矛盾を解消し、人間に最大の幸福を与えるこの感情を、すべての人が知っている。この感情が愛である¹⁹⁾。

死の間際にイワン・イリイチから死の恐怖を除き去り、死の受容を可能にしたのも、愛の

18) 同、95頁。

19) 同、120頁。

感情にはかならない。次の箇所は、『イワン・イリイチの死』に対するトルストイ自身の解説と見なされてよい。

動物的な個我は苦しむ。そして、この苦しみとその軽減こそが、愛の活動の主要な対象をなしているのだ。動物的な個我は幸福を志向しながら、ひと呼吸ごとに最大の悪に向かって、すなわち、その予感が個我のいっさいの幸福を破壊してしまう死に向かって、突きすすんでゆく。だが、愛の感情は、その恐怖を消滅させてくれるだけでなく、他者の幸福のために自己の肉体的生存をも捧げるという最後の犠牲にまで人をみちびくのである²⁰⁾。

5

『生命論』の結びの部分から引用しよう。

人間が、人間でありながら、動物のレベルまで身をおとす時だけ、死と苦しみが見えるのである。死と苦しみは案山子のように四方八方から人間をおびえさせ、前にひらかれているただ一つの、理性の法則に従い、愛の中に表現される人間の生命の道にかりたてる。死と苦しみは、人間による生命の法則の侵犯にはかならない。自己の法則に従って生きる人間にとっては、死も存在せず、苦しみも存在しないのである²¹⁾。

ここで問題にしたいのは、「死がない」「苦しみがない」と言われていることである。これは『イワン・イリイチの死』の末尾でも言われていたことであつた。トルストイによれば、人間の存在は動物的生存とは根本的に異なるものであり、それゆえ肉体の破滅（死）は人間の破滅を意味しない。人間は本質的には精神（理性）として存在するのであって、肉体として世界の中に置かれるものではない。精神としての人間は「世界との関係」として存在するとトルストイは述べている²²⁾。このような存在としての人間には、生物学的な意味での《死》は影響を及ぼさないというのである。

トルストイは人間の生について考え抜いた上でこのように述べているのであり、一見常識から大きくかけ離れている議論も、大きな意義を感じさせるものになっている。死の恐怖が乗り越えられるということが決して単なる架空事ではないことは、先にも触れた通りである。

20) 同、121頁。

21) 同、207頁。

22) 同、153頁。

だがそれにもかかわらず、次にわれわれはトルストイの説に批判的検討を加えなければならぬ。トルストイの言うことをすべて受け容れることはできないと思われるからである。とりわけ問題を感じさせるのは、痛みをはじめとする苦しみについて述べられていることである。

単純に苦痛を忌み嫌うわれわれの姿勢をトルストイが批判している点には、大きな説得力がある。だがトルストイは、さらにそこから進んで、人間が痛みをまったく感じなくなることも可能だと述べるまでに至っている。「動物的個我」の欲求を「理性の法則」に従属させきったとき、人間は痛みを感じないとトルストイは言っているのである。

われわれはみな、人間が痛みを克服し、痛みを当然のものと認めることによって、痛みをまったく感じないものになったり、痛みを耐えしのぶことに喜びを味わうようにしたりできることを知っている²³⁾。

だが、トルストイの懸命の説得にもかかわらず、このことに同意できる人は少ないであろう。たとえ愛の感情に目覚めていても、末期がんの痛みを感じずにいることはやはりできないのではないか。

この問題について考えるために、次にわれわれは一旦視線を向け変え、やはり人生の意味について考察した فرانクルの議論を参照し、新たな布置のもとでトルストイの議論を見直すことを試みたい。周知のようにフランクルは、ナチス時代の強制収容所で過酷な生活を経験し、そこから奇跡的な生還を果たした、精神科医にして実存哲学者であり、自らの経験を糧に、人間が生きることの意味について説得的な議論を提示することに成功した数少ない一人である。

フランクルが観察したところによれば、筆舌に尽くしがたい過酷な強制労働を強いられたユダヤ人たちは、日々何よりも食べ物に関する話題に熱中していたという。人間の欲求としては何よりもまず食欲が満たされなければならないことが、極限的な状況のなかで明白になったということである²⁴⁾。「動物的個我」の欲求を封じるのは、やはり容易ではない。それどころかそれは、人間の生の中心部に属していることが明らかになったとフランクルは言っているのである。

そのフランクルが、人間が生きる意味として提示したことをここで見ることにしよう。フランクルは人生の意味を次の三つのタイプに整理している²⁵⁾。

23) 同、203頁。

24) フランクル（霜山徳爾訳）『夜と霧』（みすず書房、1961年）、112頁。

25) この三つのタイプに関する本稿の論述は、フランクル（山田邦男・松田美佳訳）『それでも人生にイエスと言う』（春秋社、1993年）の「訳者解説」に多くを負っている。

(1) 創造的価値

これは「なにかを行なうこと、活動したり創造したりすること、自分の仕事を実現すること」²⁶⁾によって見出される価値である。フランクフルは、自分の人生の意味を疑う青年と話したときのことを述べている。その成年は、一介の洋服屋にすぎない自分の人生には意味があるように思えないと訴えたという。それに対してフランクフルは、「重要なことは、自分の持ち場、自分の活動範囲においてどれほど最善を尽くしているかだけだ」、「大切なのは、……生活がどれだけ『まっとうされて』いるかだけ」²⁷⁾だと答えている。どのような職業についているかに関係なく、仕事のなかで自分に与えられた役割をよく果たしているとき、人間は自分の人生を意味あるものとして生きることができるということである²⁸⁾。

(2) 体験価値

これは「なにかを体験すること、自然、芸術、人間を愛すること」²⁹⁾によって実現される価値である。自然や芸術の美を味わうとき、また、ある人をかけがえのない存在として愛するとき、そこにわれわれは生きる意味を見出すことができる。大好きなシンフォニーを聞き、感動にひたっている人に、自分の人生に意味があるかどうかを訊ねてみればよいとフランクフルは述べている。「ある」と答えなければならぬというということである。

ぜひ思い浮かべてみてください。あなたは、コンサートホールにすわって、大好きなシンフォニーに耳を傾けているとします。そして、いままさに、このシンフォニーの大好きな小節が耳に響きわたっているところです。あなたは、背筋がぞくっとするほどの感動に包まれているとします。そこで、想像していただきたいのです。……その瞬間にだれかがあなたに「人生には意味があるでしょうか」とたずねるのです。そのときたった一つの答えしかありえない、それは「この瞬間のためだけにこれまで生きてきたのだとしても、それだけの甲斐はありましたよ」といった答えだと私が主張しても、みなさんは反対されないと思います³⁰⁾。

また、ある人を唯一のかけがえのない存在として愛するときにも、同様の意味の実現があるとフランクフルは言う。次に挙げるのは、生まれてほどなくして亡くならなければならなかった我が子に大きな愛情を注いだ女性の言葉として、フランクフルが紹介しているものである。

26) 『それでも人生にイエスと言う』、72頁。

27) 同、32頁。

28) また、フランクフル(霜山徳爾訳)『死と愛』(みすず書房、1957年)、51頁を参照。

29) 『それでも人生にイエスと言う』、72頁。

30) 同、36頁。

私の子供は、胎内で頭蓋骨が早期に癒着したために不治の病にかかったまま、1929年6月6日に生まれました。私は当時18歳でした。私は子供を神さまのように崇め、かぎりなく愛しました。母と私は、このかわいそうなおちびちゃんを助けるために、あらゆることをしました。が、むだでした。子供は歩くことも話すこともできませんでした。でも私は若かったし、希望を捨てませんでした。私は昼も夜も働きました。ひたすら、かわいい娘に栄養食品や薬を買ってやるためでした。そして、娘の小さなやせた手を私の首に回してやって、「ママのこと好き？ ちびちゃん」ときくと、娘は私にしっかり抱きついてほほえみ、小さな手で不器用に私の顔をなでるのでした。そんなとき私はしあわせでした。どんなにつらいことがあっても、かぎりなくしあわせだったのです³¹⁾。

結果として実らなくても、大きな苦勞がただ無駄になるわけではない。介護のかわなく我が子をなくしたこの女性は、その苦勞を無益に思うどころか、本当の意味で生きることができたと感じている。自分以外の人に対して愛情をもつとき、人は自らの人生を意味あるものとして生きることができるのである。

(3) 態度価値

これは「自分の可能性が制約されているということが、どうしようもない運命であり、避けられず逃れられない事実であっても、その事実に対してどんな態度をとるか」³²⁾によって実現される価値である。フランクは、悪性の脊髄腫瘍を患ったある男性が、死ぬ直前に次のように語った事実を伝えている。

その患者さんは、自分の命がもう長くないことを、それどころかあと数時間しかないことをまったく正確に知っていました。私はちょうどそのとき、その病院の当直医として、この男性の最後の午後の回診をしなければなりません。そのときのことをいまでもはっきり覚えています。ベッドのそばを通りかかったとき、彼は合図して私を呼び寄せました。そして話すのに苦勞しながらこう伝えました。午前の病院長の回診のときに聞いて知ったのだが、G教授が、死ぬ直前の苦痛を和らげるため、死ぬ数時間前に私にモルヒネを注射するように指示したんです。だから、今夜で私は「おしまい」だと思う、それで、いまのうちに、この回診の際に注射を済ましておいてください、そうすればあなたも宿直の看護師に呼ばれてわざわざ私のために安眠を妨げられずにすむでしょうから、と³³⁾。

31) 同、104頁。

32) 同、72頁以下。

33) 同、76頁。

イワン・イリイチの最期と類似したものを思わせる内容である。この患者は、偶然当直医となった فرانクルの負担が少しでも軽くなるように配慮している。たった一晚のことであり、さらに自分の人生の最後のことであれば、医師に負担をかけることを気にする必要はないとわれわれは考えそうになるが、現実にはそれと逆の心境になるということである。むしろ死ぬ間際にこそ、人は少しでも他の人の役に立とうと思ひ、そのことによって心が満たされるのではないだろうか。

6

上の三つの価値の間の関係について一点整理をつけておきたい。三つの価値は並んで存在するものとして理解されてはならない。最後の「態度価値」は、決定的な状況や局面において人生の意味が際立って感じられることを意味するものであって、そこで見出される人生の意味は、内容的には前二者と重なっている。「態度価値」に目覚めた件の患者は、医師（フランクル）に対する配慮を示したわけだが、それは、自分以外の人を思いやる行為であり、愛の感情を示すものである。それは「体験価値」の一つとしてフランクルが挙げたものにほかならない。したがって、フランクルが明らかにした人生の意味は、内容的には「創造的価値」と「体験価値」の二つが理解されれば十分であろう。

このことを踏まえた上で、フランクルの概念を座標軸にして、トルストイについて見られたことを再度検討することにしたい。

《愛》についてトルストイが述べていることは、フランクルが実例を挙げながら示していることに合致しており、現実のことであることが分かる。自分以外の人に対して愛の感情を持つことは、たしかに人生を意味あるものにするものの一つである。だがフランクルの説を参照するとき、人生を意味あるものにするのが愛の感情に限られないこともまた分かるであろう。自然や芸術の美を享受すること、仕事において自分の役割をよく果たすこともまた、人生を生きるに値するものとするものにほかならない。《愛》がすべてではないのである。われわれとしては、フランクルの概念に基づいてトルストイの主張を鑄直すことを試みたい。

トルストイの言う《愛》を、フランクルが「自己超越性」と呼んだものに読み換えることができると思われる。 「自己超越性」とは、自分自身を超えて、自分とは別のものに至ろうとする精神の働きのことである。

人間の実存はその自己超越性によって最も深く特徴づけられている。……人間存在は、自己自身を超えて、もはや自己自身ではないあるものを指し示している。ある物またはある者を。満たされるべき意味またはわれわれが会う他の人間存在を。われわれが仕

える事またはわれわれが愛する人格を³⁴⁾。

自分の欲求から離れて他の人の幸福のために尽くそうとすることは、自分自身を抜け出して自分とは異なるものに同化しようとする活動の一つとして考えられるのではないか。そしてこの活動は、人を愛する場合に限られることなく、仕事に献身する場合や、自然や芸術の美を享受する場合にも指摘されうることであろう。最大級の歓喜を意味する「エクスタシー」という言葉があるが、これは本来のギリシャ語では「外に立つこと」を意味している。そのためこの語はしばしば「忘我」と訳される。自分自身を離れて自分の外に出ることができるとき、人間は最も大きな喜びを感じ、人生に意味を感じることができるとはではないか。人生を意味あるものにする事象には、《自己超越性》ということが共通の要素として含まれているように思われる。

ここで先ほどの痛みの問題に立ち帰り、この観点から検討を加えよう。人間は激しい痛みを感じずにいることもできるとトルストイは述べていた。だが身体の耐えがたい痛みは、むしろ《自己超越性》を妨げるものなのではないか。イワン・イリイチについてトルストイ自身が書いていたように、持続する激しい痛みは、人がそこから意識をそらすことを不可能にする。このとき人の意識は自らの身体に固着してしまっ、そこから逃れることができない。人生が生きるに値するものになるためには、痛みや吐き気のような激しい苦痛を抑えることが必要不可欠となるのである。

末期がんの痛みを耐えることには何の意味もないことが、すでに終末期医療の常識になっている³⁵⁾。むしろ、モルヒネ等によって痛みが抑えられたとき、患者は残される家族のことを気づかうこともできるのであって、愛によって痛みを乗り越えることができるわけではないのである。この点については、今日の終末期医療に関する知見に基づいてトルストイの説を修正することが是非とも必要である。

再三述べてきたように、トルストイの議論は深く考えられたものであり、大きな意義を持つものである。特に、加齢とともにわれわれの肉体的苦勞が増すばかりであること、われわれの人生が「それこそ死ぬまで強化されるばかりで軽減される可能性もない苦しみの連続以外に何一つ示してくれぬ」³⁶⁾ことを直視するように訴えている点で、大きな説得力を持っている。われわれは年齢とともに肉体的に着実に衰えてゆき、体の自由もきかなくなって最後は死に至る。誰もこの過程に抗することはできない。われわれはこのことを受け容れなければ

34) Frankl, V. E., *Der Wille zum Sinn*, 1972, S. 155. 『それでも人生にイエスと言う』, 「訳者解説」, 190頁より引用。

35) 例えば、竹中文良『がんの常識』(講談社現代新書, 1997年), 189頁以下, 近藤誠『患者と語るガンの再発・転移』(三省堂, 1994年), 191頁以下を参照。

36) トルストイ『人生論』, 191頁。

ばならない。われわれはトルストイとともに「もうそろそろ人間は苦しみに慣れ、苦しみにおののかず、なぜ何のために苦しみがあるのかなどと自問しなくてもいい頃だ」³⁷⁾ と言うべきであろう。

ただこのような議論から、「どんなに大きな苦痛にも耐えなければならない」とか「考え次第で苦痛を感じないこともできる」といったところにまで話が進むならば、それはやはり極論というものであろう。極度の苦痛を軽減しようとするのは、決して生命の法則に反することではない。むしろ苦痛を適切にコントロールしてこそ、われわれは人生を本当の意味で生きることができるのである。

トルストイは、「理性の法則に自己の動物的なものを従属させ」³⁸⁾ なければならないと言っているが、より正確には、両者を「調停する」と言ったほうが正しいように思われる。食べること眠ることをはじめとする本能的行動を単純に理性に従わせようとするのは、正しいことでも現実的なことでもない。重要なことは、動物的個我の欲求を正しく満たしてその暴走を食い止めることであって、それを単純に抑制しようとするのではないのである。

結 び

『イワン・イリイチの死』と『生命論』のなかでトルストイが試みたのは、ときにあまりにも無意味に見える人生を人はどのように生きてゆくことができるのかという問題について考えることであった。トルストイの議論は渾身の思索からなる重厚なものであり、われわれはそれを再読三読することによって多くのことを学びとることができる。われわれはトルストイの説に批判も加えたが、根本的な部分においてはそれを引き継ごうとするものである。

本稿でわれわれは、フランクルの見方を加えて、トルストイのいう《愛》の概念を《自己超越性》へと読み換えることを試みた。人は自分を捨て、自分から離れて、自分以外のものに没入するとき、人生を意味あるものとして生きることができる。人生の悲惨さや無意味さに絶望し、むなしさに悩む人は、実際のところ多いのではないか。それでも人が生き続けなければならないときの基本指針として、本稿は《自己超越性》を提示しようとしたものである。

37) 同、192頁。

38) 同、65頁。